

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.53)

「敵を侮るものは、その敵の手によって死ぬ」

・・・油断大敵・・・

当地へ来て実施している一つに、ポケットには常に小銭を入れておくことと、これと対比して大金は持ち歩かないことにしている。当然財布は持たずに、直にポケットにお金を入れている。それも胸ポケットと外ポケットに分散の徹底振りである。前者は、通勤の途上にも、街中にもいたるところに物乞いの人が居て、老女とか子連れには、どうしても同情して何がしかの施しをしてしまうからである。

後者はボランティア活動という性格上、潤沢にお金を持っていないという物理的な制約と、防犯上の二つの面からそのようにしているのである。旅行や必要に迫られてある程度の額を支払わなければならないときは、日本から持参したクレジットカードや、当地に所在する銀行発行のデビットカードをやむを得ず使用する。

ボラッチョ氏は、最近にいたりこれらのカード類を使うようになったが、本来は「現金派」であった。なぜかと問われると、深い意味はないが、これらのカード類を余り信用しなかったというだけである。

「現金派」と言っても、誤解なきよう伏してお願いしますが、決して「現金な奴」ではないと自負しております。さて、アメリカでは約60年、日本でも約50年の歴史を有する、クレジットカードなどは国際的に大きさや厚さなどが決まっていて、何処でも使えるので、使い始めてみると、その利便性は分かりすぎるほどわかる。ここにカードの魔力が潜み、その利便性を悪用する悪い奴らが跋扈してくる。

今回の便りに取り上げたクレジットカードを例にして、日本とメキシコの文化の違いを検証をしてみよう。ボラッチョ氏の少ない経験だけかも知れないが、日本でカード類を使用すると、多くの店がカード類のサインの照合を、殆どしないということである。カードを先に返してくれて、サインだけを支払い伝票に求められる。

官庁の提出書類や宅配便の荷物を引き取るのに、「三文判で良いですよ」などといわれることもあるように、ただ体裁だけ整っていれば良いという、サービスを提供する側の論理だけで、物事が運ばれているのと相通ずるものがある。本当にこれで良いのだろうか。

一方、当地では、先にカードを返してくれるということは絶対に無く、こちらがサインしている間、カードは自分の手元に隠すようにして、同じサインをするかどうかを確認している。私の場合は、日本語の崩し字(普通に書いているのだが、字が下手なため崩したようになってしまう)をサインにしているので、カードのサインと伝票のサインを交互に物珍しそうにながめ、絶対に真似のできないものだと思って安心するのか、直ちに返してくれる。時には物珍しさも手伝ってか、私の顔を見てニヤリと笑う。

当方も、「どうだ！まねは出来ないだろう」となどと、相手に話しかけながら、ニヤリと笑いかえす。スペイン語で日々話していて、ストレスのたまっているのを解消する、一瞬の至福のときである。なんと他愛の無い幸福感だ。もっとほかの事を見つけろ！

このような小さな事例でも、日本では、人は嘘はつかないだろうと言う前提のもとに、多くの人が性善説の側に立つのだろう。逆に当地では、人は嘘をつくかもしれないと言う、性悪説の方が優勢で、明らかに両者の対比を見るようだ。

先日開かれた、JICAメキシコ事務所主催の、「安全対策連絡協議会」の席上、我々のボランティア仲間の何人かが、カードの磁気データをコピーされて不正に利用される、いわゆるスキミング詐欺被害の事例が報告された。相当の高額から、小額まで(様子見か?)あり、怒りが募るがお気の毒としか言いようがない。

数年前には、強盗が武器などで脅してATMまで連れて行き、カードの限度額まで現金を引き出させ、日付が変わった時点で、また現金を引き出させるという事件が多発したため、現在メキシコはどの銀行でも一日の引き出し限度額が小額になり、犯罪発生率は低くなったとはいえ油断しないことだ。

この種の犯罪は、自分で注意して使用しているつもりでも、やられることもあり、まさに、「敵もさる者引っ掻くもの」である。これは、敵もなかなかどうして油断のならない者だの意だが、蘊蓄を傾けるとこの言葉は、「さる」に「猿」をかけて、さらに「引っ掻くもの」と続けた言葉遊びである。ついでにさらに言葉遊びをすると「者、もの」はスペイン語の「**mono**」(モノ)に通じ、ずばり「猿」の意味で、何と国際的な言葉遊びの完成である?(何とうまくこじつけたな。自分を褒めてやりたい!)(^ω^)

「敵」との連想で次の諺が思い浮かぶ。「**Quien su enemigo popa, a sus manos muere**」(キーエンス(ウ) エネミゴ ポパ ア ス マノス ムエレ と発音し直訳は、敵を侮る者は、その敵の手によって死ぬと言う意味で、日本語の諺は、「油断大敵」などの諺が思い浮かぶが、注意を少しでも怠れば、思わぬ失敗を招くから、十分に気をつけるべきであるという戒めだろう)

被害が起きると、例によって「金は持ち歩くな」、「カードは出来るだけ使うな」などのネガティブな対策を言われるが、それでは、「どうして生活するの、教えてよ!」などと茶々を入れたいくなる。

注意しているつもりでも、知らない内にデータが盗まれ、不正使用されてしまうということは、結局は被害にあわない為には使わないようにということか。家の中でじっとして何もしないで、テキーラでも飲んでいれば被害にあわないだろうが、このテキーラを買うのにも、カードか現金がいる。さてまたどうしたものかと考えていたら、またまたテキーラの杯が増えてしまい、買いに行く羽目にあいになった。

犯罪防止のための手段が、犯罪を引き起こす要因を増やしそうだ。何やら堂々巡りに陥ってしまった。

(2010年12月06日、現時点で先週、最後の大学での講義が終わりました。ほっとした気分です)

「欄外編」

以下の写真は、本便りに度々登場する、「テキーラ仲間の例です」(ミニボトルは時々付属として付いてくるので、呑み助の心理としては、「おお! 乙なことをしてくれるねえ!」と喉をゴロゴロ鳴らしながら、このテキーラを買ってしまうのである)。



次のページにもありま



